

「写真花嫁」たちのジェンダー史の試み

— オーラル・ヒストリーによる出自を中心に

Gender History of Japanese “Picture Brides”:
Focusing on Their Background from the Oral Histories

柳澤 幾美

Ikumi T. YANAGISAWA

はじめに

20世紀末、ジョーン・スコットは、歴史における女性の不可視性について指摘した。既存の歴史学的方法論から脱却し、自明の前提とされている女と男という性差のカテゴリ—そのものを問い直す、新しい戦略が必要であるとし、そのための武器として、「身体的差異に意味を付与する知」というジェンダー概念を提唱した（スコット 1992, 301）。また、ジュディス・バトラーはジェンダー・セクシュアリティ・セックス概念の構築を試み、ジェンダーを文化的に規定された構築物であるとし、生物学的な性（セックス）と区別した。さらに性差の決定に関する遺伝学的研究にさえも文化的偏見が見られることを指摘した（バトラー 1999）。二人の研究によって、ジェンダーとは、「文化的・社会的に性差を決める概念」と理解されるようになり、ジェンダー視点による研究が頻出するようになった。ジョーン・スコットやジュディス・バトラーの仕事は、単にジェンダーだけではなく、階級、人種、民族、障害の有無など、さまざまな「差異」への認識を高めると同時に、エスニック・マイノリティ女性の経験は、「被害者」的な主張を続ける白人中産階級の

女性とは異なることが認識されるようにもなった。その結果、移民女性史においても多様な研究を生む結果となった。

日本からアメリカ合衆国（以下、アメリカと表記）に渡った「写真花嫁¹⁾」についてもこうした流れの中で研究が進み、「無理矢理結婚させられたかわいそうな『写真花嫁』」というそれまでの視点が見直され、従来無視されてきた女性たち自身の意思が認識されるようになり、「写真花嫁」たちを主体的に、ジェンダー視点から描こうとする試みがなされてきた²⁾。

一方で、アメリカでは1970年代から、生涯を終えようとしている日本人移民一世たちの声を残そうという声の高まりとともに、彼らにインタビューする、オーラル・ヒストリーのプロジェクトが現れ、多くの一世たちのオーラル・ヒストリーが一次資料として保存されるようになった³⁾。その中でも最大の一世のオーラル・ヒストリー・コレクションの1つとされるのが、カリフォルニア州立大学サクラメント校、日系アーカイヴアル・コレクション（Japanese American Archival Collection, Special Collection, Library, California State University, Sacramento）に保存されている、「一

世オーラル・ヒストリー・プロジェクト（*Issei Oral History Project*, 以下 IOHP と表記）」のコレクションである。「写真花嫁」であった女性たちのものも25名分残されており、とりわけ資料の乏しい彼女たちの生活史を考察するための貴重な資料である。しかしながら、日本ではオーラル・ヒストリーを歴史資料として利用することにいまだに抵抗があるように思われる。ここで、ジェンダー視点による歴史記述においてオーラル・ヒストリーを利用する意義を確認しておきたい。

先に述べたジョーン・スコットやジュディス・バトラーの仕事で示されたように、歴史学においては「ポストコロニアル転回」、「ポストモダンの転回」と呼ばれるパラダイム転回があり、1980年代にそれまでの客観的・科学的な歴史叙述の特権制に対する反省が起こった。その結果、1990年代に「記憶」が歴史学の言説のなかに頻出するようになり、「記憶の歴史」への注目がもたらされた（福岡 2011, 268）。それは、個人的な体験や記憶が歴史として見直されるようになったことを意味したのであり、「女性史」から「ジェンダー史」への転換でもあった。社会学者の上野千鶴子は、ジェンダー史は、第一に文書資料中心主義に対する挑戦であり、第二に学問の「客観性、中立性」神話に対する挑戦、第三にオーラル・ヒストリー、口承の歴史証言の方法論的な挑戦でもあるとしている（上野 1997, 177）⁴⁾。一人の語りや、歴史を変える可能性も示したのである。したがって、「写真花嫁」たちの「記憶の歴史」を、オーラル・ヒストリーを資料として利用して考察すること自体が、ジェンダー視点であり、ジェンダー史となり得るのではないのか。

本稿では、従来あまり注目されてこなかった「写真花嫁」たちの「出自」に焦点をあて、先にも述べたように上記 IOHP の「写真花嫁」

たちのオーラル・ヒストリー資料を利用し、彼女たちの出自に関する「記憶の歴史」を辿り、彼女たちをアメリカに渡らせることになった要因はいったいどのようなものだったか、「写真花嫁」たちの送り出し側の要因を、彼女たちの主体的な視点、つまりジェンダー視点を中心に考察する試みである。なお、本稿では、アメリカ本土に渡った「写真花嫁」を対象とするものとする。また、IOHP のインタビューはもともと日本語で行われ、それを英語に訳したものが文書で保存されているが、本稿では筆者がそれをさらに日本語に訳した。

1. 「写真花嫁」たちは「貧しい農家」の娘だったのか

2010年11月、日本からアメリカに渡った移民たちとその家族を描いたTBS系列のドラマが放映され、反響を呼んだ。『99年の愛～JAPANESE AMERICANS』（脚本：橋田壽賀子）である。そのドラマの中で、主人公の妻として渡米した「写真花嫁」が登場する。彼女は岡山の貧しい小作農の娘という設定であった。アメリカにいる結婚相手の日本人男性から送られてきた「支度金」を借金の返済のために父親が使ってしまう、当初行くはずだった姉の身代わりとして彼女は渡米するのである。はたして、このドラマにあるように、「写真花嫁」たちはそんなに貧しい農家の出身だったのだろうか。

表1に、IOHP から「写真花嫁」たちの出身地、親の職業、日本での本人の職業、到着年、学歴などをまとめた。まず彼女たちの実家（親）の職業についてみると、当時の日本の職業は圧倒的に農業であったが、「写真花嫁」たちの親、25人のうち、農業は8人（うち酪農が1人）にとどまっており、小作農は見られない。その他には、商売、教師、警官、会社経営、地主、大工の棟梁など、当

表1. Picture Brides (バックグラウンド)

氏名	出身地	親の職業	日本での職業	到着年	学歴	到着港	渡米年齢	夫との差
Isuyo Makishima	山口	農業(自営)	農業、家事手伝い	1909	8年	シアトル	18	6
Saki Shimakawa	広島→東京	村長	教師	1910	師範学校	SF	17	15
Raku Okamoto	愛知	商売(着物、茶)	看護師見習い	1910	4年生	シアトル	22	8
Katsuno Fujimoto	山口	実業家		1912	10年		17	23
Yasu Kawamura	広島	商売→農業		1912	女学校	シアトル	23	8
Ko Takakoshi	福島	会社経営	教師	1913	裁縫学校	シアトル	20	
Katsuyo Imagawa	岡山	農業(自営)	裁縫見習い	1913	裁縫学校	SF	21	7
Oai Ishii	広島	町長、地主		1914	女学校	SF	18	7
Iyo Tsutsui	山口	教師→商売		1915	12年間	SF	20	11
Suye Tanaka	和歌山	農業	裁縫学校学生	1916	6年間	シアトル	19	10
Katsu Ichiuji	島根	農業		1916	小学校	シアトル	20	
Mazu Sakaguchi	熊本	農業(自営)	裁縫学校学生	1916	小学校	SF	21	22
Yukiko Kageta	岡山	大工の棟梁	教師	1916	中学校	シアトル	28	17
Kichi Okada	静岡	旅館経営(熱海)		1916	小学校3年	SF	20	
Masa Kajioka	福井	不明		1917	小学校3年	SF	19	
Kimiyo Kanemasu	広島	村長、商店経営(破産)		1917	中等学校	SF	20	4
Masaye Tanoue	熊本	警官、教師	裁縫学校学生	1918	小学校	ホノルル	18	5
Nobu Nagaishi	佐賀	不明	家事見習い、子守り	1919	6年間	SF	23	
Midori Kimura	長野	鉄道会社勤務		1919	女子大	SF	22	14
Haru Kobayashi	石川	農業	工場勤務	1919	小学校	SF	24	19
Nobue Masada	香川	村長	教師	1919	女学校	SF	20	18
Shiz Hayakawa	福岡	酪農業		1919	8年間	SF	20	16
Shizu Tsujisaka	和歌山	商店経営(破産)	代用教員	1920	女学校	SF	17	11
Ryoko Maruoka	新潟	教師	女学校教員	1920	青山学院	SF	25	11
Masumi Tsuneyoshi	岡山	不明		1924		シアトル	17	10
平均							21	12

出展：Issei Oral History Project, Japanese American Archival Collection, Library, California State University, Sacramento.

時としては比較的高い職業だったことが窺える。また、庄屋、町長、村長をしていたという親も目立つ。

例えば、イスヨ・マキシマの実家は、山口県岩国市で小さいながらも自営の農家を営み、米、麦、雑穀、大豆を栽培していた。彼女は7人兄弟の末っ子だったが、決して甘やかされなかったという。田植えや稲刈りの季節には田んぼで手伝い、その他の時間は家で裁縫や糸紡ぎ、機織りなどもこなした。小学校(中等教育に進まないものは当時は8年間)卒業後も家の仕事を手伝った。(Makishima IOHP, 3-4)

サキ・シマカワの実家は500年以上続く家柄で、その辺りの庄屋だったという。(Shi-

makawa IOHP, 1) ラク・オカモトの実家は愛知県の呉服屋で、後にお茶屋に転向した。父親は商売の傍ら、農業もやっていた(Okamoto IOHP, 2.)。カツノ・フジモトの父親も農業ではなく、実業家だった(Fujimoto IOHP, 4.)。イヨ・ツツイの父は教師で、後に米や雑誌などを売る商売を始めた。(Tsutsui IOHP, 1-3) カツ・イチウジは3人姉妹の末っ子であった。父親は当時としては珍しく村の寺子屋で教育を受け医者になるつもりであったが、兄が亡くなったため農家である家を継いだという。(Ichiuji IOHP, 1-2) マズ・サカグチの実家は大きな農地を持った農家だった。彼女も手伝ったこともあった。両親ともにまじめな働きもので、子どもへの躾も厳しかったという。

(Sakaguchi IOHP, 1-2.)。

ユキコ・カゲタの父親は大工の棟梁であった。彼女は実家のことをこう語る。

父はそんなに怖くて近寄り難いというわけではなかったのですが、武家出身の祖母が父を武家のやり方で育てたのでそれは厳しかったです。母は農家の娘だったので祖母に合わせるのはちょっとたいへんでした。祖母は格別でしたから。
(Kageta IOHP, 1-2)

カツヨ・イマガワの実家は、岡山県の小さな村の自営農家だった。彼女は日本では一度も家の農業を手伝ったことがなく、比較的恵まれた子ども時代を送ったようである。(Imagawa IOHP, p.2.) マサエ・タノウエの父は警官で学校で教えることもしており、彼女はたいへん厳しい家庭で育ち、朝から晩まで父にしかられていた思い出しかないという(Tanoue IOHP, 1)。広島県出身のオアイ・イシイの父親は町長だったし(Ishii IOHP, 2-4)、キチ・オカダの父は7~8人の従業員のいる熱海の旅館の経営者であったという(Okada IOHP, 1-2.)。ミドリ・キムラの父親は長野市の国鉄の職員で、当時の日本では珍しくクリスチャンだった。彼女は5人姉妹の長女として生まれた。父は新潟の農家の出身だったが、勉強をしたくて長野市にやってきて母と出会い、当時としては珍しい恋愛結婚だったという。その後、彼女の家族は、父親の仕事の関係で朝鮮半島や満州に渡るようになった(Kimura IOHP, 3)。

これらのオーラル・ヒストリーから読み取れることは、先にも述べたように、彼女たちの実家は、農家であっても小作農ではなく、また農家以外の職業も多いということである。当時の日本の職業は圧倒的に農業が多く、先

にアメリカに渡った日本人男性も農家出身が大部分であったのに比べると、その違いは注目される。

2. 「写真花嫁」たちの実家の「没落」

一方で、オーラル・ヒストリーの語りを詳しくみると、実家が倒産したり、親が亡くなるなど、彼女たちが結婚するまでに苦境に立たされた実家の話も目立つ。

例えば、庄屋だったという広島出身のサキ・シマカワは実家について、こう語る。

私の日本の実家は、田舎で500年以上続く家でしたが、結局破産してしまいました。明治時代の前には、年に一度地域の報告のために領主に呼ばれました。(中略) 明治時代、私が成長する頃までに、実家はとてもお金に困るようになりましたが、日本のしきたりのため、公的な仕事をやめることができなかったのです。母は収入がないのにやっていけないと不満を言い、私の兄の東京の家に移すと言いました。父は最初乗り気ではありませんでしたが、母の言うことを聞くことになりました。(Shimakawa IOHP, 1.)

シズ・ツジサカの父は酒、醤油、服など何でも売っている田舎のよろず屋を営んでいたが、おそらく株に失敗して、彼女が女学校に行くころには家はかなりお金に困るようになっていた(Tsujisaka IOHP, 2)。ヤス・カワムラの父親は神戸で水上警察官だったこともあるが、後に広島県呉市で商売を始め、彼女が20歳のときに倒産してしまう。(Kawamura IOHP, 1.)

キミヨ・カネマスの父は、村で最初の村長で、よろず屋を営んでいた。ところが村の人々がみんな父の人のよさにつけこんで「つ

け」で買いにくるので、結局店は破産してしまう (Kanemasu IOHP, 2)。

私の親戚の人に (アメリカにいる) 夫と結婚するよう、説得されたんです。私には2人の姉がいたのですが、2人の結婚のとき、ものすごい費用がかかったことは私もわかっていました。もし私の結婚にそんなにお金がかからなければ、両親は助かると思ったんです。(Kanemasu, IOHP, 3-4)。

また、親が亡くなって苦境に立たされたという女性も少なくない。例えばハル・コバヤシの実家は石川県の自営農だったが、彼女が10代後半のときに父が亡くなり、まだ若かった兄が農家を継いでいた。(Kobayashi IOHP, 1)。彼女はこう語る。

横浜の「ヤマト」会社の販売員がうちの田舎にやってきて刺繍を教えていたんです。私はこの人と話をつけて、勝手に横浜に行く段取りをつけてしまいました。母親は折れましたが、兄はもし家を出て行くのなら家の面目がつぶれるから勘当だと言いました。私は勘当されてもかまわないと言いました。一旦決めたからには私は出て行くから、家をもっとしっかりと立て直してほしいと兄に言いました (Kobayashi IOHP, 3-4)。

このような気丈なところが、彼女をアメリカに向かわせたのかもしれない。彼女は5年間横浜の衣服工場で働き、そこの職場の上司の紹介でアメリカにいる日本人男性と「写真結婚」をすることを決めたのである (Kobayashi IOHP, 3-7)。

コウ・タカコシの父は福島県で会社を経営

していたが、コウが7歳のときに亡くなった。母は武士の娘だったが、父の死後、会社経営を引き継いだ。(Ko Takakoshi, IOHP, 1) スエ・タナカは兄4人の後に末娘として生まれた。父は自営の農家で、彼女がまだ10代のころ、両親とも亡くなった。(Suye Tanaka, IOHP, 1)。

父が亡くなってアメリカに来ることになったのは、ノブエ・マサダもそうである。彼女の父は香川県の大きな村の村長をしていて、クリスチャンだった。彼女が女学校のときに東京に転勤になり、そこで父が亡くなったので、家族は故郷に帰ってくることにになり、母の親元でくらしした。その後、すでにアメリカにいた叔母の紹介で「写真花嫁」としてアメリカに来ることになったのである (Masada IOHP, 1-5)。

シズ・ハヤカワの両親は酪農を営んでいたが、母が亡くなった後、父は酪農をやめ、子どもたちを育てるためにありとあらゆる仕事をしたという (Hayakawa IOHP, 3-5)。ミドリ・キムラの母も末の妹が生まれてすぐに亡くなっている。(Kimura IOHP, 16-17)。

以上のように、「写真花嫁」たちの実家は、幼いころは比較的恵まれていたが、「写真花嫁」たちが結婚をすることまでに破産したり、父親や母親が亡くなるなど、苦境に立たされた実家が多かったことがわかる。キミヨ・カネマスがいうように、娘のいる家では、結婚の支度にお金がかかる。アメリカに行く「写真結婚」であれば、旅費などの費用は先方が出してくれるし、経済的に助かったという事情も彼女たちをアメリカに向かわせた要因であると考えられる。

飯野正子によると、単身男性が大部分だった日本人移民の出身地は、相対的にみて、もともと貧困状態にあった地域よりも、何らかの事情で経済状態が急激に低下した地域から

の移民が多かったという（飯野正子，2000，15）。「写真花嫁」としてアメリカ本土に渡った女性も，急激に経済状態が悪くなった家の女性が多かったということが示されている。地域的にも男性と同様，そのような地域が多かったと思われる。当時の日本，とりわけ農家が不況に陥っていった事情を考えると，このような家，地域が多かったのも不思議ではない。

3. アメリカへの憧れの思想的背景

前述のように，「写真花嫁」たちがアメリカに渡ることになったのには，経済的な理由も存在することがわかった。しかし，それ以外の要因としては，「写真花嫁」たちのアメリカへの憧れや興味があったことも事実である⁵⁾。例えば，マズ・サカグチは，「アメリカはいっぱいお金が稼げていい着物が着られるいいところだって思っていました（Sakaguchi IOHP, 7）」などと語っているし，キミヨ・カネマスも，「アメリカは住みやすいところだって聞いていました。それでアメリカに来ることにしたんです（Kanemasu IOHP, 3-4）。」と語っている。カツノ・フジモトも，次のように語る。

アメリカではすべてのものが進んでいると聞いていました。流しや，水道や，ガスのことを聞いていたし，かまどで料理しなくてもいいと聞いていました。私は文明的な生活を夢見ていたんです。（Fujimoto IOHP, 6）

それでは，そのような彼女たちのアメリカへの憧れ，期待というような思想はどのようにして形成されたのだろうか。まず，両親，とりわけ父親の影響も大きいことが窺える。例えば，広島県出身のオアイ・イシイの両親

はともに当時としては教養があり，父は日露戦争中アメリカに滞在していた経験もあるなど，「近代的」な人であったという。町役場の人がよく父を訪ねてきて，英語に訳してくれと頼まれることもあったし，父は漢語も読め，子どもたちは父に畏怖の念を抱いていたという（Ishii IOHP, 2-4）。彼女の父親がアメリカに滞在した経験が，彼女が後にアメリカに渡るのに影響を与えたことはまちがいないであろう。実業家だったカツノ・フジモトの父親は出張が多く，日本各地を訪れていたのでも視野がたいへん広がったという。（Fujimoto IOHP, 4.）だからこそ，娘をアメリカに行かせるという決断ができたのであろう。

父親や家族がクリスチャンだった影響もあるのかもしれない。ノブエ・マサダの父は香川県の大きな村の村長をしていて，クリスチャンだった。父の死後，すでにアメリカにいた叔母の紹介で「写真花嫁」としてアメリカに来ることになったのである（Masada IOHP, 1-5）。国鉄職員だったミドリ・キムラの父親もクリスチャンだった。彼女は5人姉妹の長女として生まれた。父は新潟の農家の出身だったが，勉強のために長野市にやってくる母と出会い，当時では珍しい恋愛結婚だったという。（Kimura IOHP, 3）。キムラ自身も，小学校のころ洗礼を受けているが，実際にキリスト教を理解し，深く関わるようになるのは大学時代であった。牧師であったキムラの叔父の影響が大きかったようである。（Kimura IOHP, 15-16）

他にも，「写真花嫁」たちの思想に影響を与えたものとしては，教育やその後に就いた職業の影響も見逃せない。当時，田舎では女性の高い教育を嫌ったという証言もあることは確かである。例えば，石川県出身のハル・コバヤシはこのように語る。

私の両親が上の学校（小学校より上）に行かせてくれませんでした。田舎では、女の子はあまり教育を受けられなかったのです。私の両親は心の中では思っていたんでしょうが、田舎では合わないからそれ以上の教育を受けないように言ったんです。両親は、主婦として役に立つよう、裁縫などを習わせたかったのです。(Kobayashi IOHP, 1-2)

しかし、表1にあるように、全体としてIOHPにある25人の「写真花嫁」たちの学歴は低くない。学歴を聞かれたすべての者が少なくとも小学校以上の教育を受けているし、女学校や師範学校など、中等教育を受けた者も多く、中には女子大まで出た者もいる。これは、このオーラル・ヒストリー・コレクションの「写真花嫁」だけに限らず、アメリカに渡った日本人移民女性全体にいえることである。第二次世界大戦中の強制収容所における戦時転住局によるアンケートによると、中等教育以上の教育のある日本人女性移民は、30.4%にもおよぶ(United States of the Interior 1946, 80-81)⁶⁾。これはオーラル・ヒストリーの「写真花嫁」たちの中等教育以上の教育を受けた者の割合とほぼ同じである⁷⁾。このことから、このIOHPの中にある「写真花嫁」たちが特別な一世女性たちではないということがわかる。

当時の日本では男性の教育の方がかなり優先されたのは間違いないが、女性にもより高い教育を受けさせようとした努力した親も確実にいた。ノブエ・マサダの父は石川県の村長だったが、東京に出て1年で亡くなってしまった。それでも母がお金を工面して、彼女は何とかして女学校を卒業し、その後教師として働いていた。(Masada IOHP, 4-5)

カツノ・フジモトの父親も教育を重視し、

実際に彼女は中等教育まで受けている。

父はしょっちゅう日本中を出張でまわっていたので、考えが進んでいたんです。私の母は、女はそんなに教育が必要ないって言っていたんですが、父は時代は変わりつつあるんだから、できる限り、他の費用を抑えてでも私は教育を受けるべきだと言い続けていました。(Fujimoto IOHP, 4)

父が教員だったリョウコ・マルオカは女8人、男3人兄弟の4番目だった。彼女の父はたいへん厳しかったが、子どもは教育を受けべきだと考えていて、教員の給与で子ども全員を中等教育以上の教育を受けさせた。彼女の兄弟の一人は早稲田大学を卒業している。彼女自身も、東京の青山学院女学校に5年間通い、その後、教職に就いている。(Maroka IOHP, 2-5)。青山学院はクリスチャンの学校である。

イヨ・ツツイは、海外に興味を抱くようになったのは、女学校の先生の影響であると明言している。

ある日、(女学校時代)先生がおっしゃったんです。「日本は小さな島国で人が多すぎる。主要産業は農業だ。しかし、もしこのまま日本が変わらなければ、文明国の仲間入りができないだろう。英国を見ろ。小さな国だけどたくさん植民地を持っていて産業化された国だ。だからこそ、英国は世界一の国なんだ。したがって、君たちのような若者は海外に出て自分自身を開拓しなければならない。」私は女だけれどとても感激して、先生の言葉に心を打たれました。(中略)小さくてごみごみしている日本になんかいたく

ないって、そう私は思ったんです。みんなが満州、満州って言っていたので、私は満州に行って仕事を探そうと思いました。（中略）ツツイの母が私にアメリカに行くのに興味がないかって尋ねにきました。私は満州よりもいいかもしれないって思って。国から出るのはいって思いました。それでアメリカに行こうと決心しました。（中略）アメリカは一番文明国だと思っていましたから（Tsutsui, IOHP, 9-11）。

このように、当時学校で「脱亜入欧」の思想を生徒たちに吹き込んでいたことは容易に想像できる。それが彼女たちにも海外に目を向けさせることになったのではないだろうか。中等教育機関だけではなく、小学校でもそのような教育がされていたことであろう。

前述のミドリ・キムラは、この中で唯一大学を卒業している。彼女は国鉄に勤めていた父親の転勤でソウルに行き、そこで女学校に通った。それから日本の女学校に転校し、その後女子大学に入った。女子大学の学長はアメリカの名門女子大学出身の女性だった。

私の大学の学長はミス・ホールという名前の女性でした。彼女はウェルズ大学の卒業でした。彼女は私たちに決して日本語で話しませんでした。それは学生のためにそうしていたんだと思います。彼女は厳しかったけれど、敬虔な信者だったのです。（中略）私はアメリカのことをあまり知りませんでした。でも、私の英語の先生はアメリカ人でしたし、大学の学長もそうでした。2人ともとてもいい方たちでしたので、2人から私はアメリカを想像しました。（Kimura IOHP, 15, 19）

先にも触れたように、ハル・コバヤシの父は彼女が10代後半のころに亡くなり、自分で家を出て5年間横浜で働いていたという。彼女は衣服工場で働き、その職場の上司の紹介でアメリカにいる日本人男性と「写真結婚」をすることを決めたのである（Kobayashi IOHP, 3-7）。

彼女のように、IOHPの「写真花嫁」たちの中には、学校を終了した後、職業を持っていたという女性も目立つ。賃労働していたものは、25名中7名にのぼり、その中でも教師だったものは代用教員を入れて6名もいる。彼女たちの経済的な自立も彼女たちを渡米させた要因であったのかもしれない。そのためか、結婚した年齢は、おそらく当時の日本の平均より少し高めのようなようである。

4. どんな男性と結婚したか

前述のドラマ、『99年の愛～JAPANESE AMERICANS』では、主人公と結婚することになった「写真花嫁」は、仲介人を通じて、会ったこともない女性と写真1枚の交換で結婚することになった。出身も違うし、家同士の付き合いもない、まったく見ず知らずの2人が結婚したのである。実は彼女は姉の身代わりで渡米するのであるが、男性の持っていたのは、姉の写真で、本人とは似ても似つかぬ顔だった、という、いかにも「写真結婚」らしいエピソードとなっている。また、ハワイ出身の日系三世、カヨ・マタノ・ハッタが監督して1995年に制作された、ハワイの「写真花嫁」を描いた『ピクチャー・プライド』でも、見ず知らずの2人が結婚をし、男性は年齢を詐称、また女性も両親が結核でなくなったという「訳あり」であった。このような映像作品の中で描かれた「写真花嫁」は、「会ったこともない」男性と結婚する「写真花嫁」という、従来のイメージを踏襲するも

表2. Picture Brides 夫とはどうやって結婚したか？

氏名	
1 Isuyo Makishima	仲人の紹介、年や家柄で引き合わせた
2 Yasu Kawamura	夫と親戚同士
3 Katsuyo Imagawa	夫の姉(妹)が祖母の親戚と結婚していた
4 Saki Shimakawa	夫は母方の親戚
5 Kimiyo Kanemasu	夫と遠い親戚
6 Nobu Nagaishi	自分の母親が夫の父親と再婚した
7 Oai Ishii	夫と親戚同士。幼い頃に夫は自分を見たことがあった。
8 Shiz Hayakawa	夫の姉が自分の父の再婚相手だった
9 Shizu Tsujisaka	夫の家と遠い親戚
10 Ryoko Maruoka	自分の姉が夫の兄と結婚していた
11 Raku Okamoto	出身地が近かった
12 Iyo Tsutsui	自分の母親のいとこが夫の実家の近くに嫁いでいた
13 Suye Tanaka	家同士が知り合い
14 Katsu Ichiuji	夫の兄を知っていた
15 Mazu Sakaguchi	夫の祖母が自分の家の近くの出身。よく遊びにきていた。
16 Kichi Okada	自分の知り合いと夫が親友だった
17 Masaye Tanoue	両親が夫を知っていた
18 Midori Kimura	アメリカにいた自分の叔父と夫が友だちだった
19 Ko Takakoshi	叔母の紹介
20 Nobue Masada	叔母の紹介
21 Masumi Tsuneyoshi	知人の紹介
22 Haru Kobayashi	職場の上司の紹介
23 Yukiko Kageta	仲人の紹介
24 Katsuno Fujimoto	仲人の紹介
25 Masa Kajioka	不明

出展: *Issei Oral History Project*, Japanese American Archival Collection, Library, California State University, Sacramento; 柳澤 2008. より作成

のであった。実際に、アメリカ西海岸では、「写真花嫁」たちの結婚は見ず知らずの2人が結婚するというので、「相手が誰でもかまわぬ非倫理的な結婚」(*The Star, Seattle, March 5, 1913* など)と新聞で揶揄されたが、これらはそういった「写真結婚」のイメージそのものである。では、オーラル・ヒストリーからは、どのような現実がわかるのであろうか。

表2は、「写真花嫁」たちが結婚に至った経緯をIOHPからまとめたものである。これを見ると、まず1から10まで、つまり10人は親戚同士であったと答えている。また、11から22までは、実家同士が近かったり、親戚、知人などの知り合いであり、仲人の紹介は2

名であった。このことから、ほとんどのものは、直接、間接的に知っている男性、つまりある程度信用できる男性と結婚したことになる。従来の研究にあるように、「『写真結婚』はまったく知らない相手との結婚」という言説は、少し違っているようである。

例えば、父の商店が破産したキミヨ・カネマスは、遠縁の男性と結婚することになった。(Kanemasu, IOHP, 3-4)。ハル・コバヤシは5年間横浜の衣服工場で働き、その職場の上司の紹介でアメリカにいる日本人男性と「写真結婚」をすることを自分で決めた (Kobayashi IOHP, 3-7)。

マズ・サカグチは近くに遊びにきていた夫を昔から知っていたという。

夫の父方の祖母が私の家の近くに住んでいたんです。その人が自分の孫の嫁に私をもらいたいといったのが始まりです。（中略）夫は小さい頃、祖母の家によく遊びに来ていました。私の父は、彼は小さいころ悪ガキだったから辛い目に遭わされるかもしれない、彼と結婚しない方がいいと言いました。でも私は彼は小さい頃悪かったかもしれないけれど、今はいいかもしれないと思ったんです。私はアメリカに来たかったら、親の言うことをきかないでアメリカに来たんです。（Sakaguchi IOHP, 7）

オアイ・イシイと夫は親戚同士だった。

夫のイシイはアメリカから彼の両親に手紙を送ってきて、彼の嫁を探してほしいと頼みました。結婚したいと思ったんですね。それで夫の両親がうちに結婚の話をしに来ました。（中略）私たちは親戚同士でした。とにかく、結婚は、ある意味、私の両親と夫の両親との間のことでした。（Ishii IOHP, 13）

ミドリ・キムラの場合、叔父がすでにアメリカにいた。

私の叔父と夫は親友だったのです。当時夫は独身でちょうど結婚適齢期でした。2人とも私が彼の相手にぴったりだと思ったので、それで私が大学を卒業する前に婚約しました。私は木村家に出向き、結婚納式をしました。それから私たちは手紙を交換するようになり、1年の間には私は彼のことをとてもよく知るようになりました。私の夫はニューヨークの生命保険会社の代理店にいました。また、日米

タイムスの記者もしていました。（Kimura IOHP, 17.）

1年間の文通でお互いに親密感が増したというのである。手紙によって愛情のようなものが育っていたとしてもおかしくはない。事実、彼女は渡米後初めて夫に会ったときの印象を聞かれ、「よく知っている人のように感じた（Kimura IOHP, 22）」と答えている。

なかには、ユキコ・カゲタのように、仲人の紹介で知らない相手と結婚した場合もある。仲人から、アメリカへの「写真結婚」の話が持ち上がり、知らない人であったが、彼女はアメリカに行きたいがために「写真結婚」をすることにしたと告白している。彼女はそれまで結婚をしたくないと言って、教師を続けてきたのに、である。（Kageta IOHP, 6）

ところで、当時日本が併合していた朝鮮半島からもアメリカ本土やハワイへ移民しており、「写真花嫁」も約700人から1,000人程度いたという（羅京洙 2010, 89-90）。彼女たち朝鮮半島出身の「写真結婚」の場合、プロの仲介人によって紹介され、出身地が同じということではなく、文字通り「見ず知らず」の人同士であった（Chai 1988: 1 & 2, 56）。朝鮮半島では、「同性同本禁婚」といって、同じ姓、同じ祖先のもの同士の結婚はタブーとされた（矢野百合子 2001, 128）。そのため、国内の結婚であっても、親戚同士や同じ村出身の女性は避けられた。「写真花嫁」たちの結婚もその慣習に沿って行われたのは自然なことである。親戚や知り合いが多かった日本人「写真花嫁」とは対称的である。しかし、彼らの結婚を恋愛結婚中心の結婚観から「非文明」の移民の「愛のない結婚」と切り捨てるのは、異人種である「非文明」な国への蔑みの「まなざし」からであるといえよう。

おわりに

これまで見てきたように、「写真花嫁」たちがアメリカに渡ることになった背景としては、やはり経済的な要因を見逃すわけにはいかない。しかしながら、ドラマで描かれたように始めから貧しかったというわけではなく、実家がいわば「没落」したり、親が亡くなるなど、短期間に苦境に立たされた女性たちが多かった。恵まれた時代を知っている彼女たちは、いわば起死回生を図って、アメリカに賭けたといえる。「落ちぶれた」現状から必死で駆け上ろうとしたときに、彼女たちの頭の中にアメリカがあった。アメリカに行けば、かつての生活のように、ステータスが上がるど期待したとしても不思議ではない。

「写真花嫁」たちは、アメリカへ憧れ、アメリカに行ったらお金が稼げるだろうと期待した。そのような思想形成はどのようになされたかということ、本人たちの教育が比較的高かったために視野が広がったということ、当時の出版界などのメディアに影響されたこと、親がクリスチャンであったり海外経験があったりという影響があったこと、そして本人が教師をするなど、経済的に自立していたことなどが挙げられよう。また、その結婚相手は、親戚や知り合いであるなど、ある程度信頼のできる相手であった。これは、当時の結婚が家同士の結びつきを重視するということを考えれば、納得がいく。知り合いではなくても、「アメリカに行きたいために」「写真結婚」を選んだという女性もいた。

よく知られているように、先にアメリカに移民した日本人男性の場合、「立身出世」、あるいは「脱亜入欧」という当時の風潮に押され、「錦衣帰郷」を目指した「出稼ぎ」目的の移民であった。はたして「写真花嫁」たちがアメリカに託した思いは、それとどれほどの違いがあっただろうか。彼女たちが憧れを

持ち、夢を託したアメリカに行くには、「写真花嫁」になるしかなかったのである。

先にも述べたように、オーラル・ヒストリーという資料を使うということにより、それはジェンダー史にもなり得る。出移民に関して、オーラル・ヒストリーを読み解くことで、従来の歴史研究で軽視されてきた女性の「意思」の存在が浮かび上がった。つまり、ほとんど知られてこなかった、「写真花嫁」たちのステータスの巻き返しを狙う、野心が浮き彫りになった。彼女たちの主体的な移民の動機がわかるのである。本稿で分析したのは、約1万にも及ぶと考えられる、アメリカ本土に渡った「写真花嫁」の中の25人にしか過ぎない「写真花嫁」たちの語りではあるが、それでもこれまでの歴史叙述とは別の、「女性たち」の視点からの「記憶の歴史」を提示することができたのではないだろうか。

有賀夏紀は、オスカー・ハンドリングの『アップルーテッド』に刺激を受け、かつて日本人移民の『アップルーテッド』を書こうと、日本の送り出しの思想ないしイデオロギーの研究を始めたことがあったという（有賀2009, 35-36）。本稿では、「写真花嫁」たちの「出移民」に焦点をあて、IOHPの「写真花嫁」たちのオーラル・ヒストリー資料を利用し、彼女たちの記憶の歴史を検証し、彼女たちをアメリカに渡らしめた要因はどのようなものだったかを中心に考察した。今後の課題として、将来的には、それらをアメリカに渡ってからの「写真花嫁」の歴史と結びつけ、彼女たちのジェンダー史としての「アップルーテッド」につなげることを最終的な目標としたい。

最後に、この「写真花嫁」たちのオーラル・ヒストリーの資料の中には、シズ・ツジオカがインタビューの後、このオーラル・ヒストリー・プロジェクトの責任者であるタカラベ

牧師宛に書いた手紙が収録されている。彼女はきれいな筆記体の手書きの英語で、インタビューへのお礼を丁寧に伝え、「本が出版されたら教えてほしい」と結んでいる（Tsujisaka IOHP）。自分のインタビューが掲載された本を彼女は目にするのができたのであろうか。彼女のように、自分が協力したインタビューがいつか本になることを夢見ながら、おそらくインタビューに応じたであろう25人の「写真花嫁」たちに思いを馳せながら、本稿を閉じたい。

註

- 1) 「写真花嫁」とは、写真と履歴書の交換による一種のお見合いにより、海外にいる男性と結婚した女性のこと。アメリカ本土では日本人移民女性の半分、約1万人いたとされる。
- 2) 例えばジェンダー視点から「写真花嫁」の主体性に注目したものでは、柳澤幾美「二重の偏見—『写真花嫁』イメージに隠された日本人女性移民の実像」、田中きく代・高木（北山）眞理子編著『北アメリカ社会を眺めて—女性軸とエスニシティ軸の交差点』（関西学院大学出版会、2004年）。西海岸の英字新聞での「写真花嫁」の言説に注目した柳澤幾美「『写真花嫁』問題とは何だったのか」『異文化コミュニケーション研究』7号（愛知淑徳大学大学院、2003年3月）、11-24。田中景「二十世紀初頭の日本・カリフォルニア『写真花嫁』修業—日本人移民女性のジェンダーとクラスの形成」『社会科学』、68（同志社大学人文科学研究所、2007年1月）、303-334。同「女性の市民的役割と『写真結婚』問題」『社会科学』、72（同志社大学人文科学研究所、2004年2月）、149-171。Kei Tanaka, "Japanese Picture Marriage and the Image of Immigrant Women in Early Twentieth-Century California," *The Japanese Journal of American Studies*, No.15 (2004), pp. 115-138。その他、柳澤幾美「『写真花嫁』移民禁止の経緯—日米外交の視点から」『移民研究年報』第10号（2004年3月）、97-107。田中景「『写真花嫁』の写真—移民の可視化と移民政策の実行についての考察」『国立新潟女子短期大学研究紀要』第43号（2006年）、261-270。「1910年代の排日と写真結婚」戸上宗賢編『ジャパニーズアメリカン』（ミネルヴァ書房、1986年）、293-317など。
- 3) オーラル・ヒストリーは、日本オーラル・ヒストリー学会代表の吉田かよ子によると、第二次大戦後、テープレコーダーの大衆化と共に広まり、録音した音声を忠実に書き写すことから発展し、歴史叙述の新しい手段としてアメリカでは急速に認知されるようになったものである。アメリカでは公民権運動以降に、それまで歴史上に登場する機会をほとんど与えられてこなかった、アフリカ系、アジア系、ヒスパニック系、そして女性の声を残す手段として発展し、定着してきた（吉田かよ子2004、65-66）。
- 4) アメリカにおける女性史研究は、有賀夏紀と小檜山ルイがまとめているように、公民権運動の煽りを受けた第2波フェミニズムに呼応して始まり、その後、研究対象や視点を次第に拡大させ、全体史への道を歩んできたという。それを段階で説明すると、1. 「補完的歴史」、2. 「貢献の歴史」、3. 「女性社会史」、4. 「ジェンダー史」の段階へと発展してきたとしている。（有賀夏紀・小檜山ルイ2010、7-10）
- 5) 柳澤幾美2010を参照のこと。
- 6) 1940年の国勢調査では、アメリカ本土に居住する日系人の数は126,947名で、第二次世界大戦中に強制収容された日本人移民、日系人は約12万人である。従って、このときの調査はほぼ日本人移民、日系人全体を反映していると考えられる。
- 7) ちなみに、「写真花嫁」たちが多く渡米した大正元年の女子の中等教育を受けた割合は筆者の計算によると23.9%なので、母国日本の平均学歴よりも高い女性たちがアメリカに移民していたことになる。また、しばしば日本人男性移民（一世男性）よりも女性移民（一世女性）の方が教育が高いと言われるが、この調査によると、一世男性の中等教育以上の者も割合は35.9%で、一世女性よりも高い（United States of the Interior 1946、80-81）。

引用文献

有賀夏紀。2010。「アメリカ史研究の変遷と女性移民史—アメリカ例外主義、多文化主義、トランスナショナリズム、グローカリズム」、島田

- 法子編『写真花嫁・戦争花嫁のたどった道 女性移民史の発掘』, 明石書店, 17-44.
- 有賀夏紀・小檜山ルイ. 2010. 『アメリカ・ジェンダー史研究入門』, 青木書店.
- Butler, Judith. 1990. *Gender Trouble: Feminism and the Subversion of Identity*, New York & London: Routledge. [ジュディス・バトラー (竹村和子訳). 1999. 『ジェンダー・トラブルーフェミニズムとアイデンティティの攪乱』 青土社].
- Chai, Alice Yun. "Women's History in Public: "Picture Brides" of Hawaii." *Women's Studies Quarterly* 1988: 1 & 2; 51-62.
- 福岡愛子, 2011, 「『慰安婦』問題の意味づけをとおしてみる上野千鶴子の『記憶』」, 千田有紀編『上野千鶴子に挑む』, 勁草書房, 267-290.
- 飯野正子. 2000. 『もう一つの日米関係史』, 有斐閣.
- Issei Oral History Project*, Japanese American Archival Collection, Special Collection, Library, California State University, Sacramento (Isuyo Makishima, Saki Shimakawa, Raku Okamoto, Katsuno Fujimoto, Yasu Kawamura, Ko Takakoshi, Katsuyo Imagawa, Oai Ishii, Iyo Tsutsui, Suye Tanaka, Katsu Ichuji, Mazu Sakaguchi, Yukiko Kageta, Kichi Okada, Masa Kajioka, Kimiyo Kanemasu, Masaye Tanoue, Nobu Nagaishi, Midori Kimura, Haru Kobayashi, Nobue Masada, Shiz Hayakawa, Shizu Tsujisaka, Ryoko Maruoka, Masumi Tsuneyoshi)
- Scott, Joan Wallach. 1988. *Gender and the Politics of History*, New York: Columbia University Press. (ジョーン・W・スコット [荻野美穂訳] 『ジェンダーと歴史学』 平凡社, 1992年)
- The Star*, Seattle, March 5, 1913.
- 上野千鶴子 (1997) 「シンポジウム・ナショナリズムと『慰安婦』問題」, 『論座』 32; 176-180).
- United States of the Interior. 1946. *The Evacuated People A Quantitative Description*, Washington: US Government Printing Office.
- 柳澤幾美. 2008. 「『写真花嫁』たちのオーラル・ヒストリー—カリフォルニア州立大学サクラメント校一世オーラル・ヒストリー・プロジェクトより」, 『JICA横浜海外移住資料館研究紀要』, 3: 61-74.
- 柳澤幾美. 2010. 「『写真花嫁』は「夫の奴隷」だったのか 「写真花嫁」たちの語りを中心に」. 島田法子編. 『写真花嫁・戦争花嫁のたどった道』, 明石書店, 47-85.
- 矢野百合子, 2001, 「韓国における結婚一家父長制社会に生きる」, 東京女子大学女性学研究所; 小檜山ルイ; 北条文緒編『結婚の比較文化』, 勁草書房.
- 吉田かよ子. 2004. 「歴史のひろば 日本から世界へ—オーラル・ヒストリー国際協働の可能性」, 『歴史評論』 648: 64-73.